

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

当時、一緒に務めていた教員は、「みんなで語り合う人権学習」をどう思っていたか。
受ける側ではなく、実施する側の追跡調査も同時に行いました。

Y教諭が、当時はふり返り、3つのタイトルに分けて記してくれました。

「1 当時思っていたこと」

「2 進行役の立場としての私」

「3 今振り返って思うこと」

これらを3回に分けて、ご紹介したいと思います。

1 当時思っていたこと

教師の言葉ではなく、同じ目線の友達の言葉、生活を共にしている子からの語りには、比較的、心を開いて考えられていた。その子のいつもの声で、いつもの言い方で話されると、特に素直に受け止められるという場面をよく目にした。

子どもたちは、自分の心のアンテナに響いた言葉を、思いの外、覚えていたり考えていたりする。発表はしなくても、考えを巡らしていたことは確かだと思う。黙っていて発言はしなくても、クラスの他の子たち同士のやりとりに、かなり心を動かされていた。

この、「心を動かされる」ということが重要なのだと思います。もちろん、発表してくればなおいいです。でも、発表しないからといって、子どもたちは何も考えていないわけではありません。

だからといって、教師が一方的にしゃべり続けるのも、よろしくないということ。なぜなら、「心を動かされる」のは、「クラスの他の子たち同士のやりとり」だからです。子どもたちが知りたいのは、クラスや学年の仲間がどんなことに悩み、どんなことを思っているかです。そして、つながりたいのは、その子たちなのです。

熱い思いは伝染する。ただその速度は人によって違いがある。胸に悩みを秘めている子ほど炎はつきやすく、燃え続ける。

もちろん意見を出し合うことによって、そこに参加しているもの全員が考えを深めたり、広めたりすることができるが、それだけでなく、緊張の中で誰かに聞いてもらおうと言葉を選びながら発言する中で、発表者自身も思考が深まっていた。話しているなかで、自分の考えを深めることができていた。

また、思いを出すことは、周りを信頼している証にもなっていた。そしてその信頼に応えようと、周りも発言を重ねつながっていく。どの子も自分をさらけ出すことで、良いところも、もう一つなところも、全て受け入れていける人間関係が育っていた。そうやって育った人間関係があれば、他の授業も自然と発表が多くなった。いま、推し進められている言語活動が、当時にもう可能になっていた。

人前でしゃべるという行為は、その人を確実に成長させてくれます。

それは、聞く側にとっても同じことが言えるようです。

しかもその間には信頼関係が育まれていく。

そうやって人を知り、互いを知り、関係性をつくっていく行為が、「多様な人を受け入れる」という感性を、自然に高めてくれるのだと思います。

「熱が伝わること」…このことが、一番大切なことかもしれません。

熱の出し方、伝わり方、それは人それぞれですが、いずれにしても、「熱い思い」が、人に響くための根源なのかもしれません。

みんなで語り合う人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ代表